
王子と付き合う魔法のコトバ

ムク文鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子と付き合う魔法のコトバ

【Nコード】

N5994Y

【作者名】

ムク文鳥

【あらすじ】

幸田福太郎は学校中で一番人気のある男子生徒と言っても過言ではない。

整った優しげな容貌と温厚な性格で人当たりも良く品行方正、スポーツ万能。男女問わず友人も多く信頼もある。縁なしの四角い眼鏡を愛用し、成績も学年で10位以内を常にキープ。神無月高校1年1組に在学し、現在は生徒会副会長も務める。そんな彼に何時しかついた渾名は「学園の王子様」。もちろん、彼に想いを寄せる女生徒も少なくはないが、今のところ彼の心を射止めた者はいない。

なぜなら、彼は女性から想いを告げられる時、必ずこう言うのだ。
「僕と付き合いたいのなら、次の言葉の意味を答えて下さい。それ
ができれば、あなたと付き合いますよ」

そして彼が口にするのは、まるで魔法の呪文のようなコトバたち。

「Allotopus rosenbergii」、
「Mesotopus tarandus」、
「Lamprina adolphinae」、
「Dorcushopei binodulos」、
「Phalacrognathus muelleri」な
どの一見意味不明なコトバたち。だが、ついにこれらのコトバの意
味が判る女性が彼の前に現れる。

さあ、あなたには彼の言葉の意味が判りますか？

現在、他にも連載があるため、この作品の更新は極めて遅くな
ると思います。どうか長く生暖かい目でお付き合いください。

01・学園の王子

ゴールデンウィークも終わった五月下旬。

四月にここ、神無月高校に入学した新一年生たちも落ち着きを見せ、中には所謂「五月病」に罹る者も出始める頃。

今、神無月高校では一人の男子生徒が注目を集めていた。

180cmを超える長身にすらりとした体型。短くてもさらりとした柔らかな髪に、優しげな雰囲気の非常に整った容貌。

温厚な性格で人当たりも良く、品行方正でスポーツ万能。入学して二ヶ月弱で同性異性問わず他生徒からの信頼もある。

縁なしの四角い眼鏡を愛用し、入試の成績も準主席。そして現在では生徒会の副会長までも務めている。

神無月高校の生徒会は会長以外は会長の指名制である。

会長こそ前年度に全校生徒の選挙で選ばれるが、会長以外の生徒会スタッフは全て会長に一任されている。

そして彼は、入学早々現生徒会長から指名され、副会長の役職に就いているのだった。

天から二物どころか五物も六物も与えられた彼の名は幸田福太郎こうだふくたろうという。

欠点らしい欠点は、外見と名前があまりにもミスマッチなところか。

彼と親しい者は彼の名字と名前を短縮して「コウフク」と呼ぶ。しかし、彼にはもう一つ、全校生徒が知る渾名があった。

それは「学園の王子」。

とある大きなグループ企業の経営者の血族でもあり、見た目と合間ってまさに「王子」と呼ぶに相応しい福太郎。

当然、彼に想いを寄せる女子生徒は後を断たない。

入学して二ヶ月も経たない内に、同級生は言うに及ばず先輩である二年生、三年生からも数多くの想いを打ち明けられる経験をした。しかし、福太郎は今まで誰とも付き合った事はない。なぜなら

「こ、幸田くんっ!! わ、私とお付き合いしてくれませんかっ!?!」

顔を真っ赤にしながらも、一人の女生徒が福太郎に告げた。

その顔は俯いた際に前髪で覆われて見えない。だが、ぎゅっと目を瞑り、福太郎からの返事を待っているのだろう事は容易く想像できる。

背中の中ほどまで真っ直ぐに伸ばされた黒髪の一部が、俯いた際にさらりと流れて顔の横で下に向かって垂れていた。

「あなたは、僕に関する噂を聞いたことがありますか？」

ここは放課後の特殊教室棟、最上階の屋上へと続く扉の前の踊り場。扉は施錠されているため開かないので、ここに来る者はまずいない。

人気のない静かなこの場所では殊更良く通る低い声でそう言われ、女生徒は弾かれるように頭を上げた。

「は、はいっ!! 聞いていますっ!!」

「では質問します。あなたがこの質問に答えられたら、僕はあなたと喜んで付き合いますよ」

幸太郎の口から出た「付き合いますよ」という言葉に、女生徒の顔が期待に輝く。

そして彼の口からそのコトバが零れ出る。

「『Allotopus rosenbergi』……」のコトバの意味を知っていますか？」

「え……え？」

幸太郎の口から出たコトバは、女生徒にはまるで聞き覚えのないものだった。

「あ、あの……それって……」

「知りませんか？ では『Dorcus hopei binodulosus』は？ 『Lampri madolphi nae』は？ 『Phalacrognathus muelleri』はどうですか？」

次々と幸太郎の口から溢れ出す不思議なコトバたち。女生徒には、そのコトバがまるで魔法の呪文のように聞こえた。

だがそれは、彼女を祝福する魔法ではなく、不幸な呪いをかける魔法だった。

「判りませんか？ では、申し訳ありませんが、あなたとは付き合おう事はできません」

左手の人差し指で愛用の縁なし眼鏡をくいと押し上げると、女生徒に一礼してその場を後にする福太郎。

そして残された女生徒は、呆然としたまま去り行く彼の背中を見送るばかりだった。

何時しか、学校中にこんな噂が流れるようになった。

幸田福太郎 「学園の王子」の心は魔法で閉ざされている。王子の心を射止めるには、彼にかけられた魔法を打ち破らなければならぬ。

そしてその魔法を打ち破る鍵は、王子が投げかける魔法のコトバ。魔法のコトバを理解した者こそ、囚われの王子を解放する事ができるのだ と。

「いよう、コウフク。お勤めご苦労さん」

下校するため、1年1組の教室に鞆を取りに戻った福太郎は、そこでよく見知った人物がいる事に気づいた。

「玄吾……まだ帰っていなかったのですか？」

「おまえのことが気になってな。で、どうだった？」

彼は断りもなく福太郎の席に座り、こちらを見てにやりと口角を上げた。

彼、中山玄吾なかやま げんごは福太郎の幼馴染みであり、親友とも呼べるような存在だ。

福太郎とは逆に硬そうな髪をつんつんと突き立て、顔つきはどちらかといえば野性的。しかし、彼もまた十分に整った容姿の持ち主だった。

身長は福太郎よりも若干低いが、身体の幅は玄吾の方が勝っている。

成績は福太郎よりも劣るものの、決して低くはない。逆に、運動能力は福太郎をも陵駕している程であった。

福太郎を「静」とするなら玄吾は「動」。真逆に位置するような二人だが、なぜか幼い頃より気が合い今に至っている。

「いえ、今回の女性も駄目でした。やはりあのコトバの意味が判らないようでしたよ」

「まあ、無理もないだろうねえ。アレを聞いて意味をぱつと答えられるような奴、そうはいねえからなあ」

女子じゃ尚更だろ、と玄吾は続けた。

「別にアレが判らなくってもさあ。付き合ってみればいいんじゃないかね？ 付き合ってからでも理解して貰えるんじゃないかねえの？」

玄吾の言葉に、福太郎は憮然とした眼を向ける。

誰にでも人当りのいい彼が、こんな表情を向けるのは極めて稀だ。それだけ、目の前の人物に心を許しているという事だろう。

「僕にだって、理想の異性像というものはあるんですよ」

「理想が高いのは結構だがよ？ そうそう理想の異性なんていないもんだぜ？」

「ですが、僕と付き合う女性には、やはり僕の趣味を理解して欲しい。あのコトバが判らないようでは僕あの趣味を理解できないと思います」

「おまえの趣味を理解できる女の子ねえ……かなり限られていると思うぜ？ そもそも、あのコトバが判る奴なんて頭まで完全にどっぶり嵌り込んだ奴じゃないと無理だろう。それに別に理解して貰えなくても、文句までは言わないと思うぞ。まあ、気味悪がられるかもしれないが」

「ええ。僕だってそれは判っています。でも、これだけは譲れないんです」

玄吾は福太郎の言う趣味が何なのかももちろん知っている。そして、その趣味を本当に理解できる女性が限られている事も。

当然玄吾はあのコトバの意味も判っている。中には玄吾と福太郎が親友である事を知り、彼にあのコトバの意味を聞いてくる者もいた。

しかし、彼は誰にもそれを教えた事はない。

それが、他ならぬ長年付き合ってきた親友の望みであるからだ。

「ま、頑張れ。俺はそろそろ帰るぜ」

「ええ。それではまた明日」

背中越しに手を振りながら教室を出て行く玄吾を見送った福太郎は、鞆を持つと僅かに残っていたクラスメイトに挨拶し、親友と同じように教室を後にした。

今日は彼が属する生徒会の会合もない。部活には所属していない福太郎は、このまままっすぐ家に帰るだけ。

だが、これから特に何の予定もない。

件の趣味に関しては、六月も間近なこの時期ではできる事は限られており、急いで帰宅してまでしななければならない事はない。

「……本屋にでも寄りましようか。そろそろアレ関係の雑誌が出ている筈」

誰に告げるでもなく呟く福太郎。

そして彼が足を向けるのは学校の最寄り駅の近くにある小さな本屋。

彼の例の趣味に関する書籍や雑誌はそれなりに出回っているのだが、それを取り扱っている本屋はなぜか少ない。

全国展開している大型店舗の本屋でさえ、なかなか見かけない。

しかし、その本屋にはなぜか福太郎の趣味に関する雑誌の品揃えが充実していた。もしかすると、店主が同好なのかも知れない。

理由はともかくとして、その本屋の品揃えに満足している福太郎

は、雑誌の発売日になるとその本屋へ足を運ぶのだ。

それに彼は通学で電車を利用しているので、駅に向かうのは帰り道でもある。

彼と同じように下校する生徒たちに紛れて、福太郎は駅へと足を向けた。

その場に偶然居合わせた女生徒たち 中にはなぜか一部の男子生徒も の、熱い眼差しを集めながら。

それは古くて小さな本屋だった。

昔ながらの個人書店。入り口近くにカウンターがあり、その周囲には文房具やちよつとした玩具なども置いてあった。

そして書店に入った時に感じる紙と印刷インクの独特の匂い。その匂いが福太郎は好きだった。

店内には数人の客の姿がある。駅前という事もあり、小さいながらもそれなりに客足があるようで、おかげで潰れずに済んでいるのだろう。

料理関係の書籍を立ち読みしている主婦らしき婦人の後ろを通り抜け、福太郎は目的の雑誌が置いてあるいつもの一角へと向かう。

その際、本を読んでいた婦人が驚いたように福太郎を見詰め、そのままぼうつとしていたが、福太郎は敢えてそれを無視。

だが、その福太郎の足が不意に止まった。

それは彼の目的の雑誌が置いてある一角に先客がいたからだ。

そこに佇んでいたのは一人の少女。

濃紺のブレザーにその下は白のシャツ。首元にはブレザーと同色のタイ。

膝上丈の襷付スカートもやはり濃紺で、膨ら脛までの黒のソックス。

それは間違いなく、水無月高校の制服だ。

ブレザーの襟元に留められている校章の色から、彼女も福太郎と

同じ一年生だと知れた。

黙って福太郎が見詰める中、彼女は一冊の雑誌を手にとるとそのままカウンターへと向かう。

すれ違ふ際、道を譲りながらさりげなく彼女が手にした雑誌に眼をやると、それは間違いなく福太郎が購入しようとしていた雑誌と同じものだった。

瞬間、幸太郎の身体の中を電流のようなものが駆け抜けた。

呆然と立ち尽くしたまま、眼だけがその少女を追う。

少女はカウンターに雑誌を置き、鞆の中から財布を取り出すと、代金と商品を交換して店の外へ出た。

思わずその少女の後を追って店を出ようとした福太郎のつま先が、こつんと何かを蹴飛ばした。

「これは……」

自分が蹴飛ばしたと覚しきものを、福太郎は拾い上げる。

「生徒手帳……ですか」

その生徒手帳は福太郎が所持しているものと同じもの。

無断で中を覗く事を心の中で詫びつつ、福太郎は生徒手帳の表紙をめくる。

そこにある身分証明書に貼られた写真は、彼が想像した通りのものだった。

あまり手入れの行き届いていなさそうな黒髪を無造作に後ろで束ね、洒落っ気の全くない黒縁の眼鏡をかけた少女の写真。

「伊勢……美晴……」

余り目立つたところの感じられな写真をじつと見詰めながら、福太郎はそこに書かれていた名前を読み上げる。

その容姿は間違いなく、先程すれ違った少女のもの。

この生徒手帳はおそらく、先程彼女が財布をとり出す際にでも誤って落としてしまったのだろう。

「どうかしたかい？」

福太郎がじつと生徒手帳を見ていると、背後からこの店の店主が声をかけて来た。

振り返れば身動きせずにつ立っていた福太郎を、店主が不思議そうな顔で眺めていた。

「おや、それは？」

「どうやら、先程の彼女が落としていったもののようです」

「そうか。それじゃあ私が預かるうか？ 店での落とし物として学校へ連絡しておくよ」

「いえ、わざわざ学校を通さなくても、これは僕が彼女に届けておきます」

「え？ いいのかい？」

驚く店主に、福太郎はにっこりと人のいい笑顔を浮かべる。

「同じ学校……しかも同じ学年ですからね。そんな手間もかかりませんから」

「そうかい？ じゃあお願いするよ」

福太郎の柔らかな物腰と丁寧な対応に、店主はどうやらすっかり彼を信用したらしい。

店主に頭を下げて店を出ると、福太郎は一度だけ学校の方へと目

を向けた。

「もしかしたら……僕は見つけたのかもしれませんが……」

ぼつりと呟いた福太郎は、帰宅するため駅の改札へと向かう。

そして電車に乗り、家の最寄り駅で電車を降りた時。

彼はある事に気づいた。

「あ。雑誌買うのを忘れました」

01・学園の王子（後書き）

初めての方は初めまして。

過去に拙作を読んで下さった方はお久しぶり。

何をとち狂ったか、新しい連載を始めてしまいました。まだ完結していない作品があるというのに……

新しいの書いている暇があったら、未完結のものをさっさと完結させろ、という声が聞こえてきそうです。

自分でもそう思います。ですが、なぜかむらむらっと書きたくなって書いてしまいました。

他の連載の方を優先して書いていくつもりなので、本作の更新は極めてゆっくりとなると思います。

ゆったりと長い目でお付き合い願えれば幸いです。

これからよろしく願います。

ところで、福太郎の例のコトバですが、意味が判った方はいらっしやいますか？ 特に女性で意味が判る方って、実際にはどれくらいいるんだろう？ 意味の判った方はお知らせください。どれくらい判る方がいるのか参考にさせていただきます。

02・イケメンコンビ来訪

その日、伊勢美晴いせ みはるの気分は最悪だった。

昨日、最近一人暮らしを始めたアパートの部屋に帰ると、冷蔵庫の中がほぼ空なのに気づいた。

学校帰りに買い物してくれば良かったなあと思いつつ、財布とエコバックを持って再び家を出た。

近所のスーパーで必要な食材と雑貨の消耗品を幾つか購入し、これから帰って夕食を作るのも面倒臭いなあと思いつつ歩いてる途中、不意に背後から響く金属音に慌てて振り返れば、自分目がけて猛スピードで突っ込んでくる自転車。

びっくりして飛び退き、背後からの自転車 運転しているのは空気の読めなさそうなおばちゃんだった と衝突しなくて済んだものの、飛び退いた際に食材を詰め込んだエコバックがガードレールと軽く抱擁。運悪く卵が数個昇天してしまった。

軽く凹んだままアパートに戻り、卵にまみれた食材や雑貨を何とか処理。そして気づけばその時点でもう八時を回っていた。

それから夕食を作る気にもなれず、非常食として買い置いてあったインスタント食品を夕食代わりにして、それから翌日の学校の準備に取りかかる。

その際、生徒手帳の紛失に気づいた。

それでなければなしのやる気もへし折られ、そのままベッドにダイブ。翌朝、目覚めてみれば今度は時間ぎりぎり。

朝食も摂らずに慌てて身支度を整えてアパートを飛び出し、学校に着くなり事務局へ駆け込み そのため、いつもより早く登校しなければならなかったのだ 生徒手帳の紛失を告げた。

そこで煩雑な手続きのための用紙を貰い教室へ舞い戻る。

HRぎりぎりで教室に戻り、心身共に疲れきったまま一限目の授業に突入、そして授業が終了してようやく美晴は一息つけた。

だが、その束の間の休息はあっけなく消え去ることになる。なぜなら、とんでもない来客が彼女の元を訪れたからだ。

「いやふー。みはルーン」

美晴に声をかけて来たのは級友の堂上^{どのうえ}真琴^{まこと}。

背中の中ほどまである明るい茶髪を、頭の横の部分でツーテールにしている彼女は、入学してから約二ヶ月、いまだに親しい友人のいない美晴にとって数少ない接点のある級友だった。

「何か用事？ 堂上さん」

ずれた黒縁の眼鏡を直しながら顔を向けた美晴に、真琴はにんまりとした笑みを浮かべる。

「もー、みはルンは相変わらず冷たいな！。私の事は真琴って呼んでって言ったのに」

「はいはい、気が向いたらね。それで？ 何か用事じゃなかったの？ それから私のことを『みはルン』呼ぶな」

「おー、そうだった！ みはルンにお客さんだよん」

くいくいと親指で廊下を示す真琴。

同時に、クラスの中が異様にざわついている事に美晴は気づいた。特に一部の女子が、ちらちらと自分を見ている事にも。

「ね、ね、ね、みはルンってば、一体いつの間に王子と面識ができたん？」

「は？ 王子い？」

「あれ？ 違うの？」

きよとんとして見つめ合う美晴と真琴。

「ま、いいや。取りあえず、廊下で王子が待つてるよ。早く行った方がいいんじゃないかな？」

と、真琴はにまにま笑いを消すことなく、美晴の手を引いて廊下へと導く。

そして、教室の出入り口で、がんばれーと無責任な一言と共に、美晴の背中を押して廊下へと追い出した。

「とと。一体何なのよ、もう……」

背中を押されてつんのめった態勢を整え、視線を前へと向ければ、そこには真琴の言葉通り、確かに王子がいた。

それも二人も。

「まさか、隣のクラスにそんなディープな奴がいたとは……」

今朝、教室に入るなり玄吾げんごは、福太郎に半ば拉致するかのようけいごに連れ出され、昨日の出来事を聞かされた。

福太郎に手を引かれて教室から出る際、クラスの女子の一部が何やら黄色い声を上げていたような気がするが、きっと気のせいに違いない。

「でもよお、そいつは単に例の雑誌を買ってたってだけだろ？ 誰かに頼まれて買ったのかもしれないぞ？」

「ええ。その可能性ももちろんあります。だからこうして見極めようとしてるんですよ。ところで……」

福太郎は隣に立っている長年来の友人を一瞥する。

「どうして玄吾までここにいるのです？」

彼らが今立っているのは一年二組の前の廊下。

福太郎は昨日拾った生徒手帳を持ち主に届けに来たのだが、それに玄吾まで付いて来たのだ。

「え？ そりゃあ、そいつがどんな奴か見てみたいじゃねえか」

「要するに野次馬ですか」

「まあ、そういうこつた。おっと、来たぞ。あいつじゃね？」

玄吾に促されて見れば、一人の黒縁の眼鏡をかけて髪を大きな三つ編みにした女生徒が、友人に背中を押されて廊下につんのめりながら出てくるところだった。

間違いない。昨日の彼女だ。

その女生徒を見た福太郎は内心で頷く。確かに、昨日日本屋ですれ違い、生徒手帳を落として行った女生徒に間違いない。

そしてその女生徒が崩れた態勢を立て直し、改めて自分たちの方へと視線を向けている。

さあ、見極めさせて貰いましょうか。

今度は実際に頷いた福太郎は、ポケットの中から生徒手帳を取り出すと、その女生徒の方へと歩き出した。

廊下に立っていた二人の男子生徒。確かにその二人は揃って美形だったが、そのタイプは真逆と呼んでいい程離れていた。

二人とも長身なのは共通だが、片方はすらりとした細身なのに対して、もう一人はがっしりとしたスポーツマンタイプ。

髪も片方は柔らかかそうな黒髪だが、もう片方は硬そうな濃い茶色の髪をつんつんと逆立てるようになっている。

性格も一見したただけだが、一人は穏和そうでもう一人はやんちゃそうだった。

「伊勢……美晴さん……ですね？」

二人のうち、温和そうな眼鏡をかけた方が自分の名前を呼ぶ。

「えっと、そうだけど……あなたたちはどちらさんで、どのようなご用件？」

「これは失礼しました。僕は一年一組の幸田福太郎。こっちは友人の中山玄吾です」

福太郎に紹介された玄吾が、にっこりと笑いながらひらひらと手を振った。

「はあ、幸田くんに中山くんね。それで？ 用件はなに？」

「はい。わざわざお呼び立てしたのはこれです」

福太郎は手にしていた生徒手帳を美晴の前に差し出した。

「あっ！」

当然、美晴もそれが昨日落とした自分の生徒手帳であろう事には

察しがつく。

「実は昨日、偶然この生徒手帳を拾いまして。ああ、失礼とは思いましたが、最初の身分証明書の部分だけ拝見させていただきました」
「あ、ああ、うん、気にしないで。誰のものが確かめるためでしょう？ 私も気にしないから」

「一応、中身の確認をお願いします。破損していたり、何かなくなっていたりすると大変ですからね」

そう言われて、美晴はその場でぱらぱらと生徒手帳の中身を確認する。

「……うん、大丈夫そう。特に破れたりして」

生徒手帳をめくっていた美晴の手が不意に止まる。

「……どうかしましたか？ どこか破損している箇所でも？」

涼しい顔でそう尋ねる福太郎を、美晴は一度だけ鋭い目つきで見詰めるとぱたんと生徒手帳を閉じる。

「わざわざ届けてくれてありがとう。用件はこれだけよね？ じゃあ私、生徒手帳が見つかった事、事務局へ報告に行くから」

踵を返し背中越しにそう告げた美晴は、足早にその場を後にした。その進行方向からして教室に戻るのではなく、先程の彼女の言葉通り事務局へと行くようだ。

そんな彼女の後ろ姿を笑顔で見送った福太郎は、少し背後にいる玄吾へと振り返る。

「どう見ます?」

「ありゃ脈ありだろ。どう見てもよ」

「ええ、僕もそのように感じました。ふふ、これは面白くなって来たと思いませんか?」

「程ほどにな。おまえは突っ走りだすとすぐに手加減を忘れるからよ」

「ええ。焦らずじっくりといきます。じっくりとね」

そう言つて微笑む福太郎を見て、玄吾は心の中だけで先程の少女にこっそりと合掌した。

ずんずんと廊下を歩く美晴。

目的地は先程福太郎に告げたように事務局。だけど、心は全く別の場所に飛んでいた。

(ばれた……っ!! ばれた……っ!? ……でも、どうして判つたの……? 私、高校に入ってからあれの事は誰にも話していないのに……)

美晴の心を占めるのは、先程見かけた一文。

福太郎から手渡された生徒手帳。その白紙ページの片隅に書き込まれていた一文が、美晴の心を揺れ動かす。

(あれを書いたのはあいつら……いや、あいつらじゃない。あれを書いたのは眼鏡の方だ)

先程出会った二人の美形。そのうちの一人、眼鏡をかけた温和そ

うな方の顔を美晴は思い出す。

美晴にはなぜか確証があった。生徒手帳に書き込まれた一文は、あの眼鏡の方が書いたに違いないという確信が。

足を止め、美晴はポケットから生徒手帳を取り出すと、先程見かけたページを開き、そこに書かれていた一文をもう一度見直す。

生徒手帳の白紙ページ。その最後のページの下の方にその一文は書き込まれていた。

「Dorcus hopei binodulosus」と「Lampri ma adolphi nae」、どちらがお好きですか？

02・イケメンコンビ来訪（後書き）

『王子と付き合う魔法のコトバ』を更新しました。

いや、表示されたページの中で話が一話しかないのが何となく寂しくて……。つい、こちらを書いてしまいました。

そういえば前回、さっそく感想をいただきました。しかも例の魔法のコトバのうち、「Dorcus hopei binodulus」がお判りになるそう。いや、こんなに早く判るって人が現れるとは思わなかった。

きつと他にも判った人はいるんだろうなあ。

もし、他にも判った方がおられましたら一言、「へへへ、判つちやったぜー」とお知らせください。きつと作者がじたんだ踏んで悔しがる事でしょう。

それでは、次回がいつになるのか判りませんが、よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5994y/>

王子と付き合う魔法のコトバ

2011年11月21日21時42分発行